



# 幸せの宅救便

第9便  
平成30年5月号

## 花ざかりの君たちへ

### ハネメン♀♂パラダイス



## 『軌跡』

スミ渡った青空の下。

イままでにない満開の笑顔の

だんたいは、桜の下で

ランチタイムを楽しんでいる。

パカッと弁当の蓋を開けると、

んっっ！美味しい！と

メぶかす味覚に、

ネむけもつぼみも弾けたようだ。

ハなしも弾む一同は、

へてきた歴史を振り返る。

ちいさい頃の恋、あの頃の愛…

たくさんのお逢いや別れも

君たちの生きてきた軌跡。

のびてきた歴史は、

りっぱに生き抜いている証。

かがやく人達に送る言葉がある。

ざいさんは思い出に在り、

花ざかりの君たちへ。

詳しくは公式ブログでも見られます!!  
幸せの羽 公式ブログ  
◀QRコードからもアクセス!!

Facebook 始めました★  
"いいね!"お待ちしております



# － 幸せの羽の1ページ －

人は誰でもその人生を終えるときがある。

個々の病態においても様々ではあるが、主治医が状態や経過を観察し、回復の見込みがないと診断した者を終末期と定義する。

最期を住み慣れた自宅で迎えたいと願うご本人の気持ちを一番に考え、患者さまの身体的、精神的苦痛の緩和や日常生活の援助、ご家族へのケアを積極的に実施し、保健・医療・介護・福祉の各専門職と十分な連携を図りながら、ご本人・ご家族の生活の質の維持向上を目標とし、大役を終えた後関わるすべての人が心満ち足りるように。

ご主人を数年前に亡くされ、悠々自適の独居生活を過ごされていた80歳後半の女性。食欲が落ちてきたなど感じ始めたころ、主治医より肺がん末期の宣告を受けた。これは自分の宿命と、積極的な治療は望まず在宅で生活することを希望し、私たちは出会えた。

車で1時間程度の場所にいる長女さまも、診断にショックを受けながらも、自分の家で死にたいとかねがね話していた母と同居するべきか否かを悩んでいた。同じ時間を共有しなければならない時はいつか必ずやってくる、しかし今ではない。

在宅で自立した生活が継続できるよう、身体機能の向上を図りながら独居生活を継続する。

週末に長女さまがお泊りして通院介助などリズムができた。しかし、病魔はゆっくりと忍び寄り食事量も低下、ふらつきによる転倒など長女さまの不安もピークになり、片時も離れることができなくなり、安心は得られたが、身体的疲労はピークに達した。

そこで、併設のお泊りを利用し、しばしの休憩を促したり長女さまの心身の疲労回復に努め、往診医との連携を密にしてその日を迎えた。

ご本人は最期まで同居は望まず、「最期は二人の娘に手を握ってもらいたい。」と話されていた。

緊急連絡を受け訪問すると、やりきった自信と大好きな母が少しも苦しむことなく、最期を迎えられた安堵が痛ほど伝わってきた。母の願いを叶える為に、娘さまたちは母の手を優しく握っていた。

葬儀を終えた頃、手書きの可愛らしい天使のイラストと共に、1通のお手紙が届いた。

『母の希望であったアイルランドの民謡「ダニー・ボーイ」で送り出すことができました。母は偉大であります。そして最大の子孝行をしてくれて、私たちは小さな親孝行ができました。自信を失いつつある私の背中を押し続け、介護に携わることを持続できたのは皆さまのお陰です。本当にありがとうございました。』

意志を貫き通したご本人、最大の愛情で答えたご家族。

最期のときに関わらせていただきまして、ありがとうございました。本当にお疲れ様でした。

心よりご冥福をお祈りいたします。

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
		X	X	X	X	△
6	7	8	9	10	11	12
休	△	X	X	X	X	△
13	14	15	16	17	18	19
休	△	X	X	X	X	△
20	21	22	23	24	25	26
休	△	X	X	X	X	△
27	28	29	30	31		
休	△	X	X	X		

**5月**  
デイサービス  
空き情報

○空きあり

△残りわずか

×満員



**幸せの羽** 訪問看護ステーション  
 デイサービス

〒345-0025 埼玉県北葛飾郡杉戸町清地1丁目10-7  
 HP: <http://kouha.co.com/>  
 TEL: 0480-36-1511 FAX: 0480-36-1515